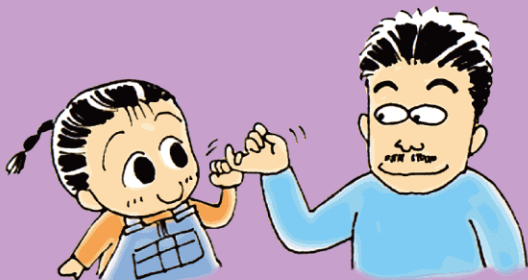


3.家庭でのルール

**ルールを守るものは、
ルールに守られる。**



- ルールってだれのためにあるんだろう。
- 子どもの言うことを何でも聞くことが、親のやさしさとは限らない。
- テレビやビデオは使いよう。
- 携帯電話やパソコンは使いよう。
- 子ども部屋を与えるときには、そのルールも与えよう。
- 家事を手伝わせたら、子どもがしっかりしてきた。

ルールって だれのためにあるんだろう。

子どもたちは、家庭でのルールや約束を守ったり破ったりしながら、人との関係の在り方や社会のルールの大切さを学んでいきます。

家庭のルールには、あいさつ、家に帰る時間、寝る時間、きちんとした姿勢などの生活上のルールもあれば、他人に迷惑をかけない、うそをつかないなどといった道德上のルールもあります。

しつけに一貫性をもたせ、しっかりと身につけさせるためにも、夫婦がよく相談してはっきりしたルールをつくり、子どもとともに親もそれを守りましょう。また、子どもの意見を聞いて一緒にルールをつくるという姿勢も大切です。

我が家の生活の約束事やルールをつくる



子どもの言うことを何でも聞くことが 親のやさしさとは限らない。



安易にモノを買い与え過ぎると、子どもは欲しいモノを手に入れるために努力したり、我慢したり、工夫したりすることができなくなります。そして、やたらとモノを欲しがり、自分の気持ちを抑えられなくなってしまいます。

ブランド品や携帯電話など、友達も持っているからなどといった理由で安易に買い与えないようにしましょう。欲しいと言ったら、なぜそれが必要なのか親子でよく話し合ってください。

子どものためを思うなら、お金より、心や愛情を使い、親子の関係を深めましょう。

子どもに我慢を覚えさせる

テレビやビデオは使いよう。

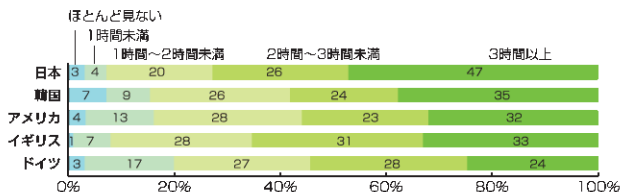
テレビやテレビゲーム、ビデオにばかりのめり込むと、人間関係をつくる力や他人を思いやる心が育たない、仮想と現実の区別がつかなくなるなど、子どもの健全な心の成長に影を落としかねません。

特に、極端に暴力的な場面や露骨な性描写が盛り込まれたものは、親の判断で子どもに見せないようにし、それを家庭のルールにしましょう。

その一方で、子どもに良いと思われる番組と一緒に見るなどして、その内容を話題に子どもとのコミュニケーションを深めましょう。

テレビやビデオの視聴時間

あなたは、普段テレビやビデオを1日に何時間くらい見ますか。



(注) 都市部に暮らす小学5年生及び中学2年生を対象としたサンプル調査約800人～約2,300人を対象
資料：「子どもの体験活動等に関する国際比較調査」平成12年・文部省（当時）

子どもが見るテレビやビデオをチェックする



携帯電話やパソコンは使いよう。

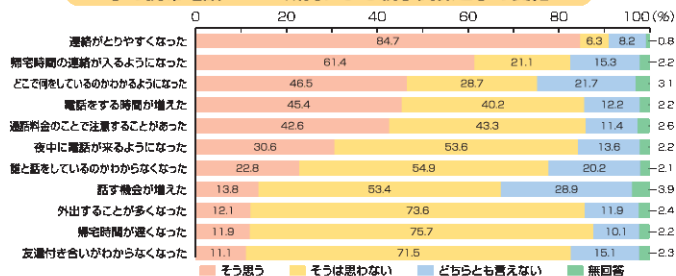


携帯電話やインターネットは、使い方一つで、役立つ道具にもなれば、子どもの身を危険にさらす道具にもなります。外の世界とすぐに情報がつながることは、見知らぬ危険な世界と子どもが直結することになります。

子どもが使用したいと言ってきたときこそ、話し合いのチャンス。「なぜ使用したいのか」などについて、親子で話し合い、納得した上で、使う・使わないを決めましょう。

使うときには、使用場所や使用時間、使ってよい目的などについてのルールを最初に家庭で決めましょう。また、マナーモードの使用などの公共のマナーや、知らない人からメールが来たら返信しないなど、危険からの自己防衛の仕方も、親があわせて教えることが必要です。

子の携帯電話・PHS所持による親子関係と子の変化



(注) 高校生の親2,881人を対象に調査 資料:「青少年と携帯電話に関する調査研究」平成12年・総務庁(当時)

携帯電話やパソコンの使い方について家族で考えよう

子ども部屋を与えるときには、 そのルールも与えよう。

今日、子ども部屋の問題がいろいろと出てきています。子どもが部屋に閉じこもると、親の注意が行き届かなくなったり、親子の会話が減ったりします。また、子ども部屋が犯罪の場になってしまう例もあります。

子ども部屋を子どもの成長に役立つようにするには、ルールが必要です。居間に顔を出してから部屋に入る、子ども部屋に鍵^{かぎ}をかけない、友人は部屋に入れる前に親に紹介する、親はその責任として必要なときに子ども部屋に入るなど、子どもの様子をしっかり把握できるように、各家庭で子ども部屋のルールづくりをしましょう。

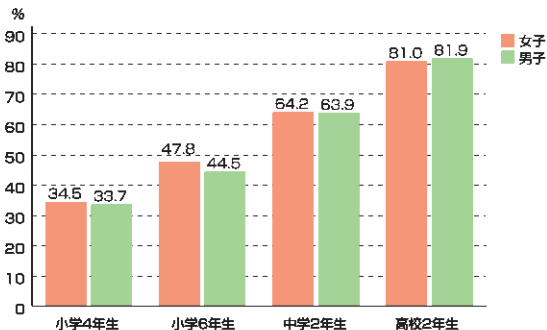


子ども部屋を閉ざさない



子どもの部屋の状況について

① 「自分だけの部屋がある」と答えた子どもの割合



② 「自分だけの部屋がある」と答えた子どものうち、「部屋に鍵がかかるようになってきている」と答えた子どもの割合

(%)

	小学4年生	小学6年生	中学2年生	高校2年生
女子	8.4	6.2	8.2	13.7
男子	12.6	9.4	11.6	10.2

(注) 各学年、約2,000人を対象に調査

資料: 「児童生徒の心の健康と生活習慣に関する調査」平成14年・文部科学省

家事を手伝わせたら、 子どもがしっかりしてきた。

子どもたちの自己中心的な言動や自立の遅れの背景には、自己責任の考え方が身につけていないことがあります。とかく親は子どもを甘やかしがちで「自分のことは自分です」などのしつけがされないことが多いようです。

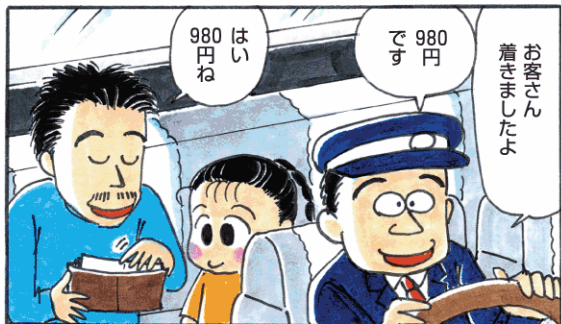
例えば、年齢に応じておこづかいの額やお手伝いなどの家庭内のルールを決め、子どもの成長に応じて責任と自立を促していくことが大事でしょう。「自分の欲しいものを自分のおこづかいで買う」経験は、子どもたちにとってかけがえのないものです。

また、お手伝いは生きていく上で最低限必要な家事を学ぶ第一歩と言えるでしょう。買い物に行けるようになったり、家の中の整理整頓とんができるようになることで、自信にもつながります。

責任感や自立心を育てる

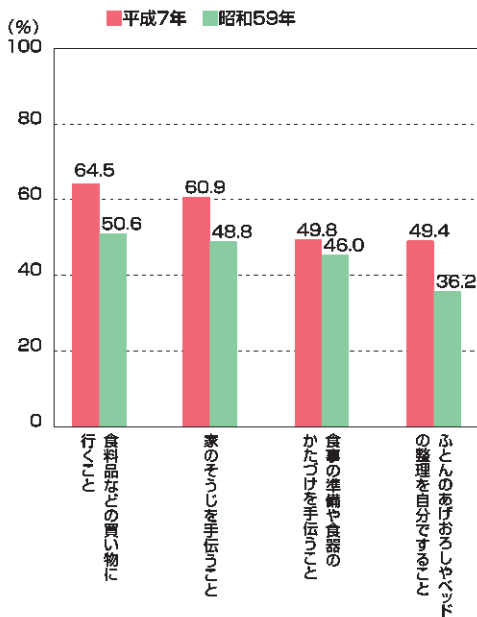


ほん
わか
本和加家の場合④



日常生活におけるさまざまな体験

「全然していない・しないときが多い」とした回答値



(注) 1都5県の小学4～6年生及び中学1・2年生約2,000人を対象に調査
資料:「子供たちの自然体験・生活体験等に関する調査研究」平成7年・文部省(当時)